

栗の小花から毬栗へ

小 関 栄

倉馬の里の西、五明の地に5月のウォーキングの際に栗の花が咲いていた。枝先に穂先状の薄緑の花を付け独特な青臭い香りを放っていた。(右の写真は、その五明の栗畑を5月15日撮影したもの)



その栗の花の根本が、初夏には短く丸まって羽毛を生やした青珠になり、穂先の花を落とした。さらに日が経ち盛夏になると刺々しいイガ(毬)を付けた緑の球になった。それが初秋にはどんどんと大きくなり茶褐色になる。

9月末から10月には、毬玉が割れ、その中の実と一緒に落下。あの薄緑の可憐な花が僅か4~5ヶ月間で全く姿を変えて刺々しい毬の実になるとは実に不思議。

この刺のある皮の栗を毬栗と云い、割れて見えるのが笑栗、落ちたものが落栗、これを拾うのが栗拾いである。

栗の実は、硬い皮と渋皮の二重に包まれているが茹でると実に甘い。甘いものが少なかった私の子供の頃、よく里で拾って菓子代わりに喜んで食べた。その頃に、栗と同じように拾い集めた木の実には、シイ(椎)、トチ(栃)、クルミ(胡桃)、クヌギ(櫟)などがあり、また、ドングリ(団栗)があった。このドングリは実の下半分が碗状の殻で包まれた木の実で、名前からも栗の一種と見られやすいが、これはブナ科の木の実の俗称、固有の木の実の名称ではない。

栗は古くから日本にあり、縄文時代の青森三内丸山遺跡でも食料としていた栗が多く出土した。また日本最古の文献の古事記や日本書紀にも、栗についての多くの記述があり、万葉集の「瓜食めば子等おもほゆ栗食めばましてしのばゆ」(山上憶良)は有名である。

なお、掛川は栗の産地である。市農業協同組合では今年も栗の生産は4,000kgを超え、多分今年も静岡県内では第一位の出荷高を占めるものと期待されている。

毬栗や 匂う小花の 大変化 淡水



[上の写真の栗の花(5月15日撮影)、盛夏の毬栗の実(7月30日撮影)、秋の笑栗(9月25日撮影)]